

幼児生活団

「生活の全てから繋がる美術」

木村佳代子

幼児生活団の美術は、特別な才能教育として教え込むのではなく、自然の中にある色、形、音に美しさを見出す感性と、感じたことを表そうとする思いと力が、子ども達が友だちと楽しく励み合う日々の生活の中で育まれていくようにと願い、行っている。毎日の生活の中で創り出し、表現したものを、子ども達が普段過ごしている生活団いっばいに展示したいと考えて美術展の準備をした。4、5、6才組全員の作品として、美術部会からの提案を受け、道路沿いに吊るす飾りを作った。駅方面から美術展に来てくださる方々を楽しくお迎えする展示となった。

子ども達が感じたままに表現し発想する力、純真に制作する姿に私たちも感動した。

リーダー 浅野祥子

I. 4才組(3歳児) 4才組は初めて親から離れて集団の中で生活

自分のことで精一杯の中で、まず手を使って色で遊ぶこと(スタンプング)をする。絵の具も、紙も、色の美しいものに触れさせ、のびのびと表現させたい。



初めて筆を使って絵を描く時も、62cm×46cmの大きい紙を使用する。

二十日大根、つるむらさき等の植物を育てること、十姉妹の世話を通して生き物の大切さを知り、それらを通して感じたことも自由に表現していく。

また粘土や、木の実など、様々な素材にも楽しみながら触れる機会を持つ。 仁科尚之

II. 5才組(4歳児) 5才組になると、生活の中に「お友達と一緒に」

「協力して」ということが増えてくる。段々に自分の社会を広げていく子ども達が、美術を通し、身近な友だちと力を出し合い、作り上げる楽しさを味わい、その経験を重ねていく。四月にはこいのぼりを制作した。「5才組になったから、大きいのを作りたい」。皆、4才組のときに一人ひとつ小さいこいのぼりを作った経験がある。

「一人で大きいのを作るのはたいへん」「誰かと作

る」「色組で作ろう」。そして地色を選ぶところから、子ども同士で意見を出し合う。子どもの背丈より長い不織布に模様を描き込むには、かな



りの力が要る。数人がかりで力いっばい。でき上がったこいのぼりを前に、皆誇らしげだ。

『粘土で作った井の頭公園』は、五月に遠足で井の頭公園に行った次の週に制作した。一人が作る小さな動物や木を、地図の上に集めて賑やかな公園ができあがった。

『体操会の中心の目印』は、一人ひとつ丁寧にテープを巻いたボールと、一人ずつ自分が考えて作った葉っぱを合わせてみんなの目印になった。

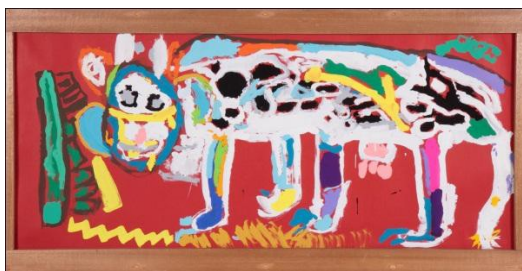
4歳から5歳の時期には、植物や動物の面白さを科学的(ごく初歩的な)に感じられるようにしていきたい。ひまわりの種を植え、大きくなる課程を実測し、それを自分の体の大きさに比べてみることで、自然科学にも数学にも繋がるおもしろさを味わえるようにと思いながら『ひまわりと背比べの絵』を子ども達と描いている。実物大の自分の形は自分では描けない。二人一組になり、一人が紙の上に寝て、もう一人が体の輪郭を描く。友達と協力してできた自分の等身大の絵と、自分が育てているひまわりの高さを比べる。本物を見ながら本物の大きさに描く絵は、とても力強い。

5才組の終わりには、お友達の絵をポスターカラーで描く。2年間一緒に過ごしてきた友達を改めてよく見合いながら、輪郭をコンテで描くことを新たに取り入れた制作をした。木村佳代子

Ⅲ. 6才組（5歳児）6才組では、飼育している伝書鳩の訓練が美術

にも繋がっている。『東京の地図』は「鳩はどのように、生活団に帰ってくるのだろう。」ということから始まった。最初にそれぞれ自分の家から鳩を飛ばす。「私は家から生活団まで、電車に乗って35分」「僕はお母さんの自転車で13分」。時間を計り、道順を思い出しながら地図を書く。一人ずつの地図では皆の住んでいる場所がよく分からない。生活団の場所を中心に、線路から立体地図を作り始めた。東京にはどんな場所があるでしょう——実際にバスに乗って東京見学をした。新宿のビル群、皇居。東京タワーに登って見渡すと、鳩になったように東京が見えた。新しくできたスカイツリーはととてもとも背が高い。実際に見て来たものを協力して作りあげた。

鳩を連れて出かけた『山登りの絵』は、和紙に墨汁と水彩絵の具で表現した。6才組最後の遠足は、訓練を重ねた鳩を連れてでかけ、生活団から100km離れた渋川から放鳩した。遠足での経験を大きな鳥の子和紙（82cm×190cm）に描いた。



『合作粘土』は、美術展の四日前に6才組全員が集まって制作した。大きなトロールが出てくる紙芝居を見た後、何をやるか相談し、5～6人で制作した。「皆の体に骨があるように、柔らかい粘土で大きいものを作るには、芯になる骨組みがいる」子ども達が形を作り上げる課程で、必要に応じて三坂先生が指導してくださった。彫塑用粘土を子どもが扱える柔らかさに練ることは、お家の方や、最高学部生の協力を仰いだ。どのグループ

も細部にまで子どもの思いと力がこもり、会場いっぱいに見ごたえのある作品展示となった。

須永幸代

Ⅳ. 母親の制作 子どもの描いた絵をもとにお母様が制作した

ものを展示した。どれも描いた子どものことを思いながら作られた力作が並んだ。

Ⅴ. 美術展を終えて 4、5、6才とも、美術展に向けての特別な作

品より、前回の美術展後に積み重ねてきたものを多く展示できたことは、美術教育発表会として良かった。ただし、作品の保管に関して多くの苦労があった。今回、旧学部実習棟に保管場所をお借りでき、たいへんありがたかった。

現在の生活団は、指導者の交代時期にあり、美術指導にも、設営・展示等の実務にも経験者が少なく苦労した。会場にいらしたお客様で、「この会場は楽しいですね」「生活団の作品で元気をもらいました」などと言ってくださる方が何人もおられ、たいへん嬉しく感じるとともに、子どもたちがいきいきと美術で表現できるように、指導者の研鑽を積まなくてはいけないと痛感した。

今回は学生の実務を初めて最高学部1年が担当した。当年度に生活団で実習をおこなっている学年なので連絡がとりやすく、リーダーを中心に生活団の現状を理解しながらよく働いていた。反面、全体のリーダーが上級生ということで連絡や確認を取りにくいこともあり、学生にも苦労があったようだった。良い記録を残してもらいたい。

また、幼児生活団は展示会場としては唯一、土足禁止として通させていただいた。普段幼児が午睡にも使うフロアに、大勢が土足で入るのは好ましくない、ということからの判断だが、次回に向けて検討し、準備をしていきたい。木村佳代子

追記：この原稿作成中に、幼児生活団の美術を25年にわたり御指導くださった三坂 制 先生がご逝去なさいました。今回の美術展に際しても制作の指導、展示作品の選択、会場全体の構成および設営にいたるまで、熱心に御指導くださいました。ここに心からの感謝を表し、平安をお祈りいたします。



6才組 コードを釘で打って線路を作る



6才組 皆が住んでいる東京の地図



6才組 スカイツリーを作る



6才組 動物の織物



6才組 鳩の糸図 鳩 鳩小屋の様子



6才組 合作粘土



5才組スタンプングで彩色した木の箱

6才組自分で作った植木鉢に植えたオキザリス



「トロールのおじいさん、おばあさん」



「12人のお姫様をのせたトロールの馬」



6才組 等身大の子ども



4、5、6才組合作 私たちの生活団



6才組 形に切ったベニヤ板に色を塗る

5才組 体操会の絵
(ガム、水彩、マーカー)



4才組 はじめての筆の絵 十姉妹の絵



5才組 体操会の中心の目印



5才組 和紙で作ったランプ



5才組 遠足で行った井の頭公園

作品をつくる 作品をつかう

6才組 植木鉢



7月

縄、貝殻、鎖など、さまざまなテクスチャーで模様をつけた粘土の板を好きな形に切り取り、型に貼り付けて、植木鉢の形をつくっていく。



8月

2週間乾かして素焼きした鉢に、釉薬をかける。

9月 本焼きして完成した
植木鉢



10月 自分の植木鉢に、オキザリスの球根を植える



11月
美術展会場を彩ったオキザリスの花



体験を絵に描く

6才組 山登りの絵



6才組は秋の遠足で埼玉県吾野市の顔振峠（574m）に、山登りをする。吾野駅（標高188m）から峠の頂上まで、全員で歩きとおす。頂上から生活団に向かって連れて行った鳩に手紙をつけて飛ばした。



遠足の翌週、皆で集まって話し合い、山の景色や情景をよく思い出した。ひとりひとり半切の大きさの画仙紙に、墨汁で描いていく。





墨汁で描けたら和紙を裏返し、裏から水彩絵の具で彩色する。

後片付けも自分たちで



壁面いっぱい貼り並べた「山登りの絵」の展示

